

CALL 教室を利用した授業の実践報告

古荘 智子（愛知大学名古屋校舎語学教育研究室）

要旨

本論は愛知大学名古屋校舎のW401教室に導入されたCALL(Computer Assisted Language Learning) システム, CaLabo EX version 6.6 (CHIeru株式会社) の機能をいくつか使用し、英語の授業を行った実践報告である(特に断りがない限り、本論でCALLと書く場合はCHIeru社製の当該製品を指す)。CALLシステムの機能については、新学期が始まる直前に開かれた講習会で説明を受けた。教室が割り振られる前に本年度のシラバスは既に入稿が完了していたため、CALLの使用を中心に組み入れた授業実践ではなく、今年度のシラバスに影響しない範囲内で来年度の授業計画に向けて、どのようなことができるのかを探ることが主な目的となった。また学生にとってもCALLを利用したタスクに取り組むのは、初の体験である。学生のシステムへの適応のしかた、1つのタスクから次のタスクへと移行する際の様子、そして学習効果など、さまざまな観点から授業を観察し2012年度を終えた。本論で紹介する機能は、CALLの機能の中でも基本的で、簡単な操作で行えるシンプルなものである。多くの先生がたに本大学に導入されたCALL機材で何がどのようにできるのかをご理解して頂くと共に、CALLを含めたメディア教材を利用した語学教育(あるいは語学以外の科目も含めて)に興味・関心のある先生がたと、本論をきっかけに交流が持てるようになれば有り難いと思っている。

キーワード：CALL, e-learning, 英語学習, 学習者中心, 自律的学習

1. はじめに

記念すべき2012年4月、新校舎でのスタート地点は、筆者の場合CALL教室だった、といっても過言ではない。予想外にも、今期は担当授業の半分前後のコマをCALL教室に充てていただき、春休み中は期待と不安で胸を躍らせながら過ごしていた。そして、新学期初日、まるで新入生のようにドキドキしながら真

新しい教室に入って行った。CALLシステムの紹介は学期直前に納入業者の説明会によって行われたが、実際に教卓に立ち、新しい機械に触れ、操作するのは初めてである。「どうぞお手柔らかに」と祈るような気持であった。「本当に説明会のデモで見た、便利な機能を使いこなすことができるのだろうか？」デモで紹介された機能を上手く使うことができれば、今までより格段に質の高い授業を提

供できる。愛知大学の学生を「あっ」と、言わせるような、授業を展開できるはずだ。学生の反応が楽しみでしかたなくもあり、と同時に、新しいシステムを使つての授業展開は、様々な面において、リスクを背負ったチャレンジでもある。そして、その予想はどちらも裏切られることはなかった。1つの機能を使うたびに学生からの嬉々とした反応が返ってきた（これについては後ほど機能の紹介と共に詳述する）。しかし、その1つ1つのタスクを実行するには、予想を超えるハプニングとトラブルの連続が待っていた。ストレスで眠れない日が続き、相手が言葉を話さない機械であるという、何ともやり切れない苛立ちを抱えながら、来る日も来る日も、絶えることのないトラブルの処理に走り回った辛い新学期だった。しかし、そんな中であって、本当に幸いであったことには、筆者の強引でわがままとも思えるような、お願いや希望までも1つ1つご理解くださり、骨身を惜しまず実現に向けて知恵を絞って下さった情報システム課のスタッフの方々、それから、学期当初体調がすぐれなかった筆者をずっと陰で見守って下さっていた語学教育研究室の方々のお気遣い、「板書が十分にできない」という筆者の訴えに、その日のうちに学内では稀少なホワイトボードを工面して下さった教務課・総務課の方々、そして、泣きごとや愚痴を受けとめ、励まして下さった先生がた

のサポートが本当に暖かく、そのような優しくも信頼できる人間関係に支えられていることを常に感じながら、次々に起こる問題と対峙できたことである。着任3年目の筆者にとって、今回の経験は、本大学での授業が、いかに多くの方々の協力と努力によって作られているものなのかを知る機会になったと共に、陰となり日なたとなり労を尽くして下さっている方々の「愛大スピリット」を深く感じ入る機会ともなった。あえて本論に入る前に、周りで支えて下さった全ての方々に、心から感謝を申し上げたいと思う。そして感謝の気持ちを込めて、1つ1つの貴重な体験を思い起こしながら、実践報告として記していきたいと思う。

2. 授業実践

英語の授業とCALL機能

2012年度に担当した授業は、Practical English, TOEIC I, TOEIC III, Reading I,IIである。Practical English は国コミを除く名古屋校舎における全ての学部の2年生が受講する春学期のみの半期科目であるが、1年生のCommunicative Englishから2年生の秋学期で履修するTOEIC Iへの架け橋として位置づけられている科目である。その名の通り、実践的な英語力を習得することを目的とし、テキスト及び授業シラバスは担当

者に任されている。TOEIC Iは共通シラバスによる統一テキストを使用し、TOEIC IIIは3年生以上を対象とした選択科目、ReadingI,IIはハイレベルクラスをCALL教室では担当した。これらの授業の中で使用した主な機能は以下のとおりである。

2.1 出席管理機能

まず、出席管理機能を紹介する。学生がログインした状態になれば、教員側の操作ボタン1つで授業中のどの時点でも登録は完了できる。取り込まれたデータは、CSVファイルで教員PCに保存されている。また出席を取りたい時間を任意に指定しておくことも可能で、それを利用すれば、遅刻者管理にも対応可能である。

2.2 オンデマンド機能と個別学習支援機能

CDやDVDの音声や動画を、Movie Telecoと呼ばれるオンデマンド機能を利用して、その場で学習者ファイルとして送信できる機能である。例えば、Practical Englishでは、学習者は配信された音声ファイルを利用して、シャドーイング（モデルの音声について発音すること。この時、ヘッドセットからは自分の声は聞こえないシステムになってい

る）や発音トレーニングを行った。自分の音声は録音ボタンを押すと、ダビング→再生する事ができる。基本的な機能は昔のLL教室を踏襲しているの、ご存知の先生がたも多いと思う。録音・再生はモデルの音声、自分の音声、両方を重ねた音声と切り替えができる。LL教室では主力であったカセットテープとの違いは、音声波形機能により、モデルの音声の波形図と学生自身の音声の波形図が個々のPCディスプレイに映し出され、耳からだけではなく視覚からもモデル音声との比較ができることだ。

学生が録音した音声は、教師側PCへ提出ができる（音声提出機能）。回収したファイルは、USBなどに移し、持ち帰ることも可能である。時間が取れる時は、回収したファイルをランダムに開き、スピーカーを通してクラス全体で聞く機会を設けると、学生達にはよい刺激となった。クラスメートの発音にはモデルの発

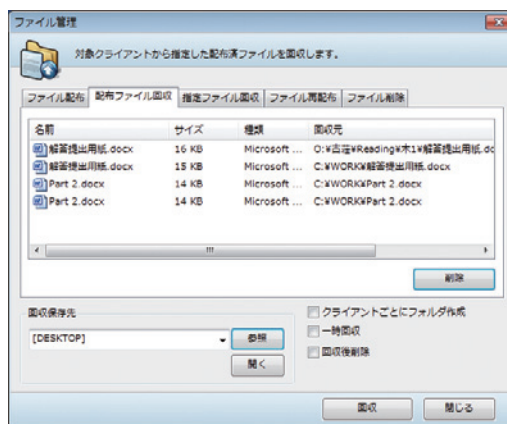


図1 配布ファイル回収画面

音よりも敏感に、鋭い反応を示し、それが意外に大きな刺激となり励みとなっていたように思われる。

2.3 会話機能

学生が個々のPCに向かって発音練習を行うだけでなく、学生同士で発話練習を行う際に、会話機能は便利でかつ楽しい。ペアプラクティスの相手をランダムに設定すると、学生はヘッドセットのマイクを通し、セットされたペアの相手と作業に取り組み始める。最初は自分のブースが誰とつながっているのかは分からない。相手の顔が見えないので、マイクを通し、相手に話しかけ、言葉をつないでコミュニケーションをとっていく。筆者は当初、学生同士の会話が弾まなければ、このタスクは失敗に終わってしまうだろう、と懸念していた。しかし、そのような心配はどのクラスでも不要だった。どのブースの誰とつながっているか分からないワクワク感、相手を確認し、話をしたことがないクラスメートとは友達になる。クラス内の空気もフレンドリーになり、その流れに乗って、その後の授業がスムーズに進行する（学生側の雰囲気が良いと教員も授業にのって来る）。何よりも学生が嬉々としてタスクに取り組む姿を目にすることができるのは嬉しい。「英語で話しかけなさい」「もしもし」ではなく、“Hello”と呼びかけ

なさい！」と、同じ指示を毎時間繰り返しても、「もしもし～」と話しかける学生たちではあったが、英語を使う機会を沢山与え、そして日本語であれ英語であれ、楽しんでタスクに取り組むことができれば、英語学習に対する考え方、取り組み方も少しずつ変化するであろうと期待している。

この会話機能を利用し、TOEIC I ハイレベルのクラスでは、TOEICのリスニングPart2の問題を学生たち自身で作成させ、質問者と解答者に分けペア練習をさせた。その後、問題として作成したスクリプトを見せあい、出題の狙い（TOEICではいわゆるdistractorと呼ばれる「ひっかけ」の選択肢が含まれている）を検討させたり、また文法や発音上の誤りなどがあれば、互いに指摘させあった。普通レベルのクラスでは、テキストの問題を使い、ペアで問題を出し合い、スクリプトを見て答えを検討させる。TOEICの問題を単に聞き流すので



図2 授業風景

はなく、CALLを利用して発音矯正や会話練習、英作文の練習へとタスクを発展させ、総合的な英語力を向上させるよう心がけた。

会話機能はまた、学生たちの思考回路を把握するにも便利な機能である。よく利用したのは、文法問題の答え合わせをペアで行わせ、「なぜその選択肢が正解なのか」を互いに説明させる。教員は学生の会話をモニタ機能を通して聞いていき、学生たちの理解度や答えを選ぶまでの思考の流れを把握していく。TOEICは全て選択式問題であるため、解答は正しくても、解答に到達するまでの考え方の道すじが正しいとは限らない。会話機能は学生たちの生の声を聞き、その場の必要性に合わせてフィードバックを返すことができる、学習者中心の授業には有用な機能であるといえる。

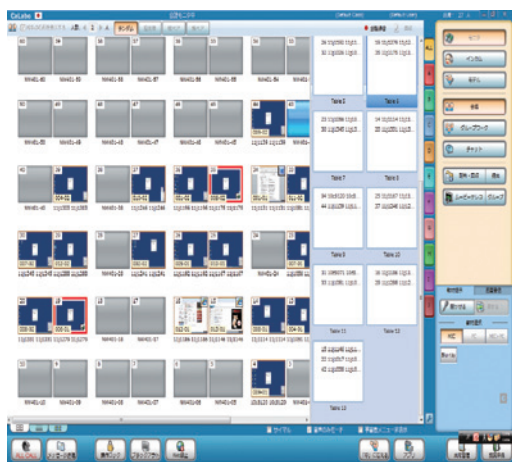


図3 会話機能（ペア）画面

2.4 チャット機能

TOEIC Part5の答え合わせで活躍したもうひとつの機能がチャットである。チャットに解答と、なぜその解答を選択したのかを書かせて投稿させる。前述した会話機能ではペアで行っていたタスクを教室全体で行うのである。投稿する速度に差がないように「1、2の3、ハイ！」で一斉に送信させる。ある文法項目に関して学生がどの程度の知識を持っているのか、あるいは、どこで学習の躓きが起こっているのか、を瞬時に把握することができる為、学生のレベルや理解の程度に合わせて解説を行うことができる（1～2クラスで実施すると大よその傾向やパターンが把握できるので、CALL教室以外で行っている同一科目の授業へも適用ができた）。学生側は教員に分からないところを理解させることができ、教員は学生の分からないところを理解できる。教員が一方向的に解説を行うのではなく、双方向の授業を行うことができるため、学生の満足度は高く、教員側には充実感がある。また、学生はクラスメートからの投稿を読むことによって学ぶことも多い。教員側から改めて説明を加える必要がない場合もあった。さらにまた、一方向的に教員が解説を行っていく形態の授業では、ターゲットとなっている項目を既に理解している学生は、得てして退屈してしまうのだが、チャットで自ら

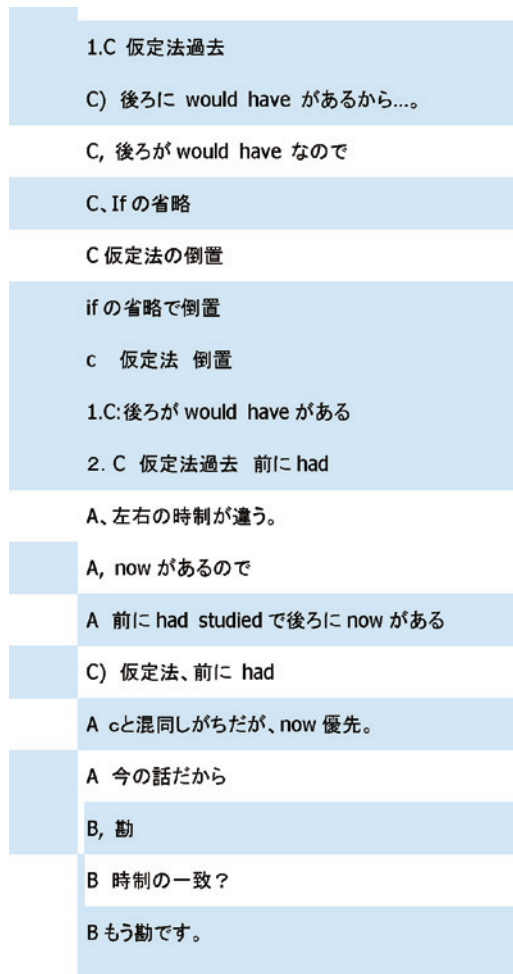


図4 チャット画面

の知識を示し、また他者から認められることによって、授業参加に対する、ある種の満足感が得られたようである。

チャットの利用で興味深かった点は、学生たちは自分の意見を投稿した後、流れてきたコメントに対して、レスポンスを付けてやり取りをする、ということがごく自然に行われていったことである。対面で「～について知っている人は手を挙げて下さい」と指示をしても、なか

か手を上げてくれない年頃である。ところが、チャットを使うと、積極的に意見が出る。教員が指示を出さなくても学生同士でディスカッションらしきことがごく自然に行われていった。時に笑いあり、冗談あり、脱線もあるが、30名規模のクラスで、学習者同士の意見交換がこれほど活発になされ、授業が展開される所以は、LINEやTwitterなど学生が日頃から馴染みのある、「書く」コミュニケーションの形態を介しているからであろう。

チャットという媒介を使い、1つのトピックについて、教員と学生、学生と学生とのコミュニケーションの輪が広がっていった。文法が苦手な学生が多く、ともすればワンパターンで無味乾燥になりがちな文法項目の教示に、チャットは大いに役立った。今後、授業のシラバスに合えば、英語ライティングの指導など、英語を使ったコミュニケーションの授業に適用していきたいと考えている。

2.5 自動抽選機能

学生の指名を機械がランダムに抽選する機能である。抽選ボタンを押すと、ログオンしている学生の学籍番号を表示する。学生達にも画面が見せることができるので、次はだれが当たるのか分からないという緊張感ゆえに授業に集中する。取り分け必要性が高い機能ではないが、

物珍しさも手伝って学生たちには受け入れられていたように思われる。

2.6 メッセージ送信機能

教員が学生にメッセージを文字で伝えたい場合に利用できる。例えば、学生がリスニングの作業を行っている場合など作業を中断させることなく、注意事項等の連絡をする場合に便利な機能である。また、やや不便ではあるが、黒板の代りとしても代用ができる。

2.7 学習者PCモニタ機能

ここからは、主に学生用PC制御に関する機能についてまとめて紹介する。

●アプリケーション（キーボード・マウス）リモートコントロール機能

学生用PCを教卓側で操作ができる。モニタリング機能を通し、学生が作業手順や操作で困っていることに気づいた際には、教員側のPCから学生用PCの操作をサポートできる。また、個別対応のみならず、リモートコントロールした学生用PCをモデル送信し、全員に提示することにより、クラス全体に教員の操作を示すことも可能である。

●キーボード・マウスロック

授業とは全く関係のないインターネッ

トを閲覧していたり、不必要な使用を防止することができる。

●ブラックアウト

学生用PCのディスプレイを真っ黒にすることにより、教員の説明、あるいは作業に集中させる場合に用いる。

3. 問題点

次に、機能を使用する過程で問題に感じたことを記していく。

3.1 アナライザ機能

教員が出題した問題やアンケートに学生が解答（回答）を行い、結果を集計・分析する機能である。正答率（誤答率）が瞬時に表示されるため、結果を見ながら解説に役立てることができる。ゆえにTOEICなどの演習問題ではきわめて有効な機能である。CALL機材によっては、問題を入力せず、教卓PCから解答（例えばA,B,C,Dの4択問題など）を入力すると、問題と答え合わせが完了するアナライザもあるのだが、本学のCALL機材では、問題と選択肢を事前に入力し、準備しておく必要がある。筆者の場合は既存のテキストを使って授業をしているため、問題と選択肢は既にテキストに載っており、改めて手入力する必要性はない。大量の問題を毎回入力する時間と手間を考えると、アナライザ機能は使

えなかった。この問題に対処するためには、以前から利用していたMoodleのアンケート機能を利用した。Moodleでは問題番号だけを入力すれば、問題と選択肢を手入力する手間は省くことができるのでお薦めしたい。

3.2 e-learning教材に関する利用制限の問題

CALL機材には、多彩なe-learning用デジタル教材が搭載されている。TOEIC用の教材だけでも、語彙強化、リスニング強化、文法トレーニング、英文速読・文法トレーニング、それに470点、600点、730点と3つのレベル別攻略法と模試なども導入されている。TOEIC以外にも、超ロングセラー（筆者が学生時代から英会話用の教材として既に使用されていた）ともいえるテキスト *Viva San Francisco!* が搭載されているし、*Roman Holiday* や *CASABLANCA* など映画教材も搭載されており、授業の内外で使える魅力的なコンテンツが多い。説明会で紹介された時、「副教材として是非とも利用しよう」と心に決めていた。しかし残念なことに、これらの利用はW401でのPCに限定されていた。その理由は、契約費用やライセンス等のやむを得ない問題があるためである。しかし、一般的に言えば、e-learningの最大のメリットは、時間と空間にとらわれず、学生が都合の

よい時間にどこからでも学習が可能であることだ。現在の大学英語教育の現場では、大学受験時をピークに下降する大学生の英語力と英語の学習時間を補うために、授業時間外でe-learningを利用し自主学習をさせることで、不足している英語の授業時間数を少しでも補おうという流れが一般的である。専門分野に必要とされる英語力の習得であれ、TOEICのスコアアップが目的であれ、1回90分、週1~2回の授業時間だけでは、目標到達には到底及ばないことは明らかである。このことを考えると、W401教室だけにデジタル教材の利用が制限されていることは、残念に思う。また筆者の場合は同一科目を複数クラス担当し、CALL以外の教室でも授業を行っているため、CALL教室を使用するクラスの学生だけにデジタル教材を使用するという「特権」を与えることはできず、授業で使用できる科目もまた制限されることになり、せっかくの機能を十分に生かすことがさらに難しくなった。そして何よりも、高価で最新鋭のソフトが沢山導入されているにもかかわらず、一握りの学生を除く、殆どの学生が利用対象外であり、その存在すら知らないという現状に対して、非常に残念に思う。以上述べたように、非常に魅力的で学習効果が高いと期待できる、強力なデジタル教材が備わっているCALLではあるが、ライセンスの問題もあり、現時点では学内の1教室という限

られた場所での利用しかできない点が非常に惜まれる。

4. まとめと今後の課題

CALL教室を利用させていただき、様々な機能を取り入れて2012年度の授業を行ってきた。その結果、どの機能をどのように使用すれば、授業を効率よく進めることができるのかを把握することができた。それは単に機械の操作方法を習得したということだけではなく、どの機能に対し、どんな風に学習者が反応を示すのか、あるいは、どのような流れでタスクを組み込んでいくと、1つの作業から次の作業へとスムーズに移行できるのかを観察し、把握することができた。普通教室での授業とは違い、CALL教室では学生の反応を確認し、インタラクシオンを取るかわらで、機械操作を行う必要がある。あちらこちらへと神経を使い、作業を段取りよく進めていかねばならないため、不慣れなうちは、ストレスも多く、ハードワークではある。巷にはCALL教室に関する指導書や情報は数多く存在しているが、CALLの機材が違い、学習者が異なれば、指導書は参考にはなるが、そのとおりに決して進まないのが現実である。操作自体もLL教室のアナログ方式と比較すると、それなりに複雑にはなっているし、ボタンを1つ押し違えたがゆえに、学生の前で冷や

汗を流しながら、四苦八苦することも、幾度となく経験した（そしてそのたびに「今日の授業は最低最悪だった」と自己嫌悪に陥った）。また、こちらに非はなくても、様々な原因で機械が動かない場合も多々ある。それでもやはりCALLを利用した授業を積極的に取り入れていくことを望む最大の理由は、学習者中心の授業、いいかえれば、学習者が語学を習得するにあたり、CALLの機能を授業に取り入れることによるメリットが非常に多いと確信しているからである。また、教員と学生、学生同士のコミュニケーションに関しても変化があった。教室内で1人の教員が30数名の学生に向かって一方的に講義をするスタイルとは全く異なった、変化に富んだコミュニケーションを実現させた。来年度以降は本年度の経験を土台とし、それを更に発展させることにより、授業の質を高めると共に、学生それぞれのニーズにあった英語の学習に対するモチベーションを高め、自律的学習者の育成を目指した英語学習の指導を実践していきたいと考えている。

参考文献

見上 晃, 西堀 ゆり, 中野 美知子 (編): 英語教育におけるメディア利用—CALLからNBLTまで—, 英語教育学大系 第12巻, 大修館書店 (2011).

Okamoto, M: Lexical Attrition in Japanese

University Students: A Case Study, *The Japan Association of College English Teachers (JACET) Journal* No.44. 71-84. (2007).

篠原 正典, 青木 久美子, 尾崎 史郎, 仲林 清, 葉田 善章: ICT活用教育導入ガイドブック, [http://www.code.ouj.ac.jp/research/ictguidebook/\(2011\).](http://www.code.ouj.ac.jp/research/ictguidebook/(2011).)

竹蓋 幸生, 水光 雅則 (編): これからの大学英語教育—CALLを生かした指導システムの構築—, 岩波書店 (2005).

竹蓋 順子: CALLを活かす英語教育システム—教員が担う役割に関する考察 (A CALL-Based English Language Teaching System: Investigation on Teacher Roles), *e-Learning教育研究 (Studies in e-Learning Language Education)* 第5巻, 10-19. (2010).